

文化

小説は、人とは何かを探求してやまない。

「babe1 (バベル)」3
(大阪府八尾市木の本2の23
2・森中方「真銅孝」エチカ

31歳のサザ子は派遣先を突然リストラされた。この年まで彼氏も、服装への興味もなく生きてきて、少し蓄えがあるので当面は困らないが、やはり不安はある。公園でたびたび出会う、外国人の風貌のベネディクトゥスに相談すると、オランダの哲学者スピノザの名著「エチカ」を薦めてくれた。本には、どうにもならなくなったときの対処法があった。

サザ子の血を吸おうと付きまとう季節外れ蚊の「私」はサザ子の不安を表徴、サザ子の分身として「エチカ」と名乗り「エチカ」論の体現者でもあるらしい。サザ子と「エチカ」私を

同人誌

女独りの生き方探る

合わせた三人称の一元化を試み、女独りの生き方を探る実験的作品。同誌の井上豊晴「メリーラウンド」。同棲8年目の男女は、倦怠と男の浮気はじめの刻を迎えた。人間に幸せの種を手渡す鹿男という名の「見えないタマシイ」を介し、これからの生き方に結論を得る。不可思議な香りがする作品だった。

「別冊關學文藝」59 (大阪府和泉市光明台2丁目48の47・伊奈方) 浅田厚美「曇り空のピオラ」。主人公が丹精して育てたピオラの花鉢を2日続けて盗まれる。誰がなぜ? 不安が錯綜する心理描写が巧みだ。家人から花泥棒は緑の服を着た大柄なおばさんという情報を得る。

古い隣人からは、この辺りでは以前からよく被害にあっていたことを聞く。20年前、多数の鉢植えに囲まれ、ボロボ団にくるまって寝るおばさんが廃虚で捕まるが、彼女には全く罪の意識がなかったという。花泥棒はストレスの発散、いたずら程度

なのか。「でも私のピオラは…」と主人公は憤る。世の中には、他人にとっては取るに足らないものでも、珠玉と思えるものがあると訴える好編。

同誌の知鬼遊仁「虫とバク」。アナログ好みのボクは凶鑑で絶滅危惧種の「タガメ」を見るのが趣味。爆発的売れ行きの日常支援ロボットのメンテナンスエンジニアだが、原因不明で停止する1台のため、休日返上で働く羽目に。人と人工知能(AI)の将棋を巡る意外な結末が光る。やがて人間がAIに支配されるのでは…という恐怖。時宜を得た作品だ。

「浮橋」4 (芦屋市松浜町5の15の712・小坂方) 小坂忠弘「水を売る人」。小さな会社の社長のぼくと詐欺師まがいの山縣さん。江戸時代の冷や水売りが、冷水でないのに冷たいと偽って売るような、危なっかしいのどこか温かみのある付き合いに魅力を感じた長編小説だった。

(野元 正・作家)

想像は創作の世界を限りなく広げる。

「雑記囃子」24 (伊丹市森本1の1の4の317・加藤方) 稲葉祥子「あやとり巨人旅行記」。西の国に住む男は何かの異変で「巨人」に。東の国で電柱を引き抜き、電線であやとりをして迷惑者扱いされるが、人妻だったノリと出会ってからは、胸のポケットに彼女を入れて満開の桜を探し歩く、やさしく純粋な一面を見せる。ガリバー映画出演のため南の国へ行くが、巨人に飽き足らないノリがスカウトマン、シモンと不貞。それを知った巨人は、開き直った彼女にそのかさ、シモンを海へ投げ捨て、それを目撃した女優マリアも海へ遺棄する。

同人誌 現代社会、痛烈に風刺

2人は東の国で、電線の綱渡りなど曲芸をしながら彷徨う。巨人はやがて北の国の森林伐採場で働き始め、伐採コンテストで優勝。だが賞金を同僚のポンに盗まれる。ポンを追ってすつたもんだの末、西の国にたどり着いた巨人は、国の救世主に祭り上げられる。聖山の噴火でシロバナ花粉に汚染されたこの国で、母譲りの免疫を持っていたため、巨人はこれ以上の花粉拡散を絶つため山腹の穴をふさぐ。

現代社会を痛烈に風刺する。巨人とは何の暗喩か、さまざまに想像を巡らすことができる、興味深い長編奇譚だ。

「あるかいど」67 (大阪市阿倍野区丸山通2の4の10の20

3・高島方) 高島寛「塀の向こう側」。舞台は昭和30年代。諸熊が経営する貸家12戸は、大阪・木津川尻の低地に隣接する市営住宅の敷地ぎりぎり、盛り土をして建てられた。そのためくみ取り口が市営住宅の庭先4尺

(1尺20寸)の高さにすらつと並ぶことに。雨が降ると、雨水は市営住宅側に流れ込み狭い庭は水浸し。しかもくみ取りの臭いはひどい。市営住宅の住人は、境界に塀を建てるよう要求する

が交渉は物別れに。そんなとき、境界から貸家までの幅1尺5寸(45寸)ではくみ取りの柄杓の方が長く、くみ取り作業が困難と判明。市営住宅の住民は早速、境界に仮の鉄条網を張って様子を見る。

庶民同士の駆け引きをユーモラスに描写。懐かしい昭和を巧みに切り取った好編だ。

同誌の切塗よしを「その風は蒼ざめていた」は、もう若い男女の切羽詰まった思いを鮮烈に描く。

「播火」105 (姫路市香寺町香呂371の1・大塚方) 北山眞佐子「たそがれ、一丁目一番地」。連載ものだが、なぜか懐かしいタイトルに誘われて読んだ。穏やかな刻を感じる。特に息絶えたメジロを手に乗せる場面は心打たれる。渡辺孔「合切袋」。学識の豊かさが随所に見て取れる。六甲山を歩き先輩を偲ぶ辺りが印象深い。

(野元 正・作家)

人間はなんと複雑な生きものか。

「白鴉31」（尼崎市南清水13の3・藤本方）2年ぶりの発行にエールを送る。美月麻希「白い骨眠る谷底」。純花は32歳の介護職。父と2人で暮らす。職場では役立たずと、毎日下の世話に追われるバイト扱いだが、入居者が眠りにつくまで添い寝するという特技があった。あるとき、彼女は山深い神社地にある数戸の小屋「家なき村」を知る。住人は心に傷を持つ60半ばの元中学校教頭センセイ、老婆ヒロとヨネ、ひげ面の大男クマ。純花はたびたびここを訪れるようになる。

折しも純花の父が病死。生前の指示どおり、父の年金を不正受給するため、嫌がるセンセイを巻き込んで遺体を神社奥の谷底に遺棄する。容形が似るセンセイを父親に仕立てて2人は同居し始める。やがて純花は毎夜センセイに添い寝し誘惑する

同人誌

現代社会の問題、編み込む

が、彼は堪える。父を遺棄した「白い骨眠る谷底」を訪れた帰り、純花は町で、自分に劣情を抱くクマを見かけ、もくろみを知られたと気づく。一方、大阪に逃げたセンセイは、ニュースで大男の情報や純花の失踪を知る。

純花は悪女か？ 介護やホームレス、年金の不正受給など、現代社会を表象する問題を編み込んだミステリアスな好編だ。

「てくる」26（大津市竜が丘30の15の713・平野方）さあらりこ「ミル・コリンのふもとへ」。ミル・コリンとは「千の丘」のことで、アフリカ・ルワンダを意味する。日本人の「私」はアフリカの友人3人と、80万人も犠牲者を出したルワンダ大虐殺の故地、虐殺記念館を訪問。その凄惨さを目の当たりにし、「人間はこんなことまでできるのか」と思い知らされる。人間とは何か、問いかける秀作。

「姫路文学」133（姫路市飾磨区今在家3の27の1・中島

方）千田章介「経正冥行」。

「私」は、在所の高砂市阿弥陀町に「但馬守」という字名を見つけた、平敦盛の兄で、琵琶の名手、但馬守経正に興味を持つ。彼の戦死地は「神戸市兵庫区」という説や「但馬守の地で自害した」と諸説あるため、「私」

は真実を求め平家ゆかりの京都・六波羅蜜寺界わいへ。ほど近い六道珍皇寺を訪れ、ゆかりの小野篁に導かれて冥界に迷い込む。そこでシテが経正の幽霊を演じる本来の能とは異なり、「私」がシテとなって経正を務め、能が演じられる。

守覚法親王が経正に下賜した琵琶の名器「青山」を巡る物語や小野篁が遣唐副使の命を断つた逸話、経正の琵琶湖・竹生島詣でなど、奇妙な幻想の後、「私」は六道珍皇寺門前で一夜を過ごしたことを知る。小説ならではの探訪と飛躍。兵庫の地にまつわる物語だけに心躍った。

（野元 正し・作家）

文化

苦難を乗り越えた彼方に必ず光明があると信じた。

「飢餓祭」45(奈良県大和高田市市場84の26・夏当方)夏当紀子「花火は見えたか」。七重は83歳。日ごと世の中すべてがかすんで見える。孫の車で、生まれ育った瀬戸内海の島の両親の墓に詣でる。帰りは4歳年下の弟が軽トラで迎えに来たが、弟の運転は危うい。

母の没後、幼い姉弟を残し大阪に出た父に代わり育ててくれた祖母は、七重が5歳のとき倒れた。姉弟は父に引き取られるが、2人は父から毎日殴る蹴るの虐待を受ける。弟をかばえなかったこと、父の女が弟に与えた手作りの白い犬のぬいぐるみ

同人誌 現代に差す真心の光明

を横取りしたことなど、七重はずっと罪の意識にさいなまれていた。祖母が回復し、姉弟は島に戻る。七重は中学卒業後、弟を置いて大阪に就職するが、そのことも後ろめたく思っていた。終戦間際、父は応召戦死する。

懐かしい祖父母の家は集中豪雨で埋もれ今はもうない。弟の住む丸太小屋から大阪の方向を望むと音のしない白い花火が見えた。墓に弟の名があった、と孫はいう。果たして弟はすでに死んでいるのか。七重の意識は混沌とする。苦難とともに生きる七重の描写が鮮やかだ。白い花火、白い犬の暗喩も興味深い。

「同人誌の秋元潔「父といた夏」。医師が歴史家か、選択を迫られる「ぼく」は、医師だった父の魅力的な生き方を知る。人生の

岐路に立つ青年の苦悩を繊細に描き、巧みさ光る作品だ。

「あべの文学」29(神戸市須磨区友が丘8の201の18・森口方)蒼井ふみ「土の記憶」。子どもらが巣立ち、夫と2人暮らしの時子の生きがい近く公園でのボランティア活動。除草作業が快感となった時子は、公園に近い白い家の前の歩道の雑草が気になって仕方がない。隣人の話だと白い家のある夫婦はすでに亡く、離婚して戻った50代の息子が独り住まい。ものぐさで庭も荒れ果てている。時子は夫の制止も無視して草抜きを決行する。

さらに時子は男に断って庭の除草まで始める。初めは無関心のように見えた男が缶コーヒを差し出したのがきっかけで、次第にうち解けていく。男の母のセラニウムの植え方や樋に詰

まったツタの根っこ、台風の強風に耐えたカツラの木。何げない会話から互いの思いが通い合う様子が感じられる。隣人のふれあいが希薄な現代、ふつと真心の光明を感じさせる秀作。

同人誌の日野あすか「語りに恋すー竹本義太夫」。浄瑠璃に独自の語りを生み出した義太夫の物語。作者の独自の視点が光る。「老人文学」4(大阪府東大阪市菱屋西6の5の15の210・眞住居方)眞住居明代「大和川」。物語は奈良県と大阪府を流れる大和川一帯を舞台に、小学1年・道子の視点で語られる。川縁に住む同級生たちに向ける。川縁に大人たちのいわれのない差別と、おぼろげにもらい子ではないかという思いを抱く道子の精神的成長を描いた好編だ。(野元 正・作家)

(第3種郵便物認可)

2019.8.29

文化

小説世界は人生の厳しい局面をも美しく切り取り輝かせる。「淡路島文学」15(洲本市栄町2の2の26・三根方) 藤井美由紀「光と影」。大学を中退し神戸の製菓会社で秘書兼通訳として働く20歳の藤井格三は、淡路島の実家に盆で帰省中、確執のあった父光太郎、出産直後死んだ母の代わりとして育ててくれた叔母たち、国文学者で俳人の叔父乙男、腹違いの姉はるとの再会を通し、自分のルーツを知る。

祖父、藤井市郎利義は1870(明治3)年、徳島・阿波藩と淡路支藩稲田藩の身分差別騒

同人誌

生命誕生の荘厳さ

動、庚午事変(稲田騒動)で自刃。父は彼の跡を9歳で継いだ最後の侍だった。14歳で役場に出任し、乙男の学費など家族の面倒をみた。表題「光と影」も示すが、俳人乙男の雅号「紫影」は光太郎への感謝の気持ちだ。稲田藩主が家臣に別れの盃を贈る場面、父と叔父乙男が淡路島特産「鳴門みかん」を植える場面が特に印象に残る。盃には、父と、早世の祖母、自刃の祖父、2人の母らとの悲しい「別れ」が重なる。一方、みかんは「再会」の象徴。格三が創った英語の詩では、幸せを運ぶ木と詠む。史実とルーツ探しを巧みに絡めた好編だ。

「mon」14(大阪市阿倍野区帝塚山1の10の45の208・飯田方) 飯田未和「羽化」。不幸な死産を経験した「私」は、義母が次子を期待して無農薬の自家製野菜を大量に送ってくることにプレッシャーを覚える。それから1年、「私」は世間と疎遠に。見かねた夫から家庭教師のアルバイトを勧められる。真面目でおとなしい生徒、理紗とはすべしうち解けたが、体調不良を訴えしばらく休んで以降、勉強に身が入らない様子。「私」は理紗の恋を知るが、秘密を誓う。送られてきた野菜の中にアオムシを見つけた「私」は、その姿に自分と理紗を重ね、静かに見守ることにする。

そんなとき、妊娠し家出した理紗と相手の少年が「私」を訪ねて来る。どうすべきか、本当は分かっている理紗たちは泣き、明日、家に帰ると言う。そんなとき、あのアオムシがアゲハチョウに羽化し、夫の「生きろよ」という言葉に送られ、青空に消える。

健康な子を授けられなかった不運から立ち上がる夫婦と、授けても周囲の憂慮から諦めるしかない若い2人。これは生命誕生の荘厳さと相対する永遠の課題であろう。

「カム」17(大阪府高槻市深沢町1の15の11・伊藤方) 中山文字「カケコミヒメ」。もうすぐ20歳の大学生「私」は、処女なのを気にし、合コンで知り合った男のアパートに泊まって自分から誘う。だが短大卒業後、介護福祉士をめざす24歳の男は応じない。その後、紆余曲折を経て2人は奇妙な愛に目覚める。その経緯が軽妙なタッチで描かれる。意外に真面目な現代若者氣質を垣間見た気がした。

(野元 正・作家)

文化

小説は人生におけるさまざまな可能性や奇跡を秘めている。

「ばあじゅ」40記念号（京都府八幡市橋本興正7の4・石野方）。2014年12月の本欄で31号を取り上げ、評論家、大阪芸術大学名誉教授で主宰者だった山田幸平氏の遺言「40号まで、つづけなああかんよ」を紹介したが、同人の努力でそれが叶えられた。

その40号から関野みち子「ヤミノカケラ」。桐子は持病の緑内障が進み、視界の一点が欠ける。そんなとき、一人娘の奈美恵が戻ってきて、不倫相手との子を産むと告げる。2カ月がたち、桐子はベッドから落ち

そうになつて隣で眠る娘にふと殺意を抱くと、大きく膨らんだ腹が光り、「ワタシヲコロサナイデ」という声が聞こえ、狼狽える。桐子は相手の男を突き止め、それを知った娘は出奔。あの声に苛まれながら約2年半が過ぎた。突然、娘と共に2歳児向けの子ども服が送られてくる。娘とあの声の子が帰ってくるのだらうか。そんな悪夢を見た朝

「ばあば」とあの声が聞こえ、娘と孫が玄関に立っていた。シングルマザーの娘と世間体を気にする桐子の心の闇を、視野欠損という緑内障の症状と重ね、最後に孫に会う光明を配した秀逸な作品だ。

「別冊關学文藝」58（大阪府中央区内平野町2の3の11の202・澤標内）浅田厚美「ペイント・レスン」。

「私はツールペイント教室を自宅で主宰。春から通う森山さんがデザインした、黒地に2輪のクレマチスのサンバイザーが評判となり特別注文を受ける。だが、作品は「私」の最後の仕上げなしでは一定レベルに達しない。クリスマス前の2日前、歳暮代わりの大きなシクラメンを携え森山さんが個人レッスンに来た。特別注文の今度の絵柄は、白い胡蝶蘭や宝箱。未熟で不器用な彼女には難しいが、なんとか夕方までに完成させねばならない。彼女から見れば、「私」の技術は「神の手」だが、「私」は失恋から芸大受験を断念したという挫折を抱えている。ふと見ると夕日に染まる窓辺のシクラメンの葉陰に無数の蕾が首をもたげようとしていた」。

同人誌

可能性と奇跡を示唆

2019.7.30朝刊

「私はツールペイント教室を自宅で主宰。春から通う森山さんがデザインした、黒地に2輪のクレマチスのサンバイザーが評判となり特別注文を受ける。だが、作品は「私」の最後の仕上げなしでは一定レベルに達しない。クリスマス前の2日前、歳暮代わりの大きなシクラメンを携え森山さんが個人レッスンに来た。特別注文の今度の絵柄は、白い胡蝶蘭や宝箱。未熟で不器用な彼女には難しいが、なんとか夕方までに完成させねばならない。彼女から見れば、「私」の技術は「神の手」だが、「私」は失恋から芸大受験を断念したという挫折を抱えている。ふと見ると夕日に染まる窓辺のシクラメンの葉陰に無数の蕾が首をもたげようとしていた」。

「文の鳥」2（西宮市段上町6の11の15・笹部方）河内降雨「ツイー・ウェイズ」。なぜか自殺した男だけが集まるある場所では、同じく自死した管理人が死者の生前の事情を聞き、次に進むべき2つの道を教える。死者は自己の人生を納得のいくまで反芻し癒やされ、やがて、進むべき道を選ぶ。仮想の世界を描きながら現代社会の病巣を抉る。集まってくるのが男だけというのは何かの隠喩か、それとも皮肉か。

「文の鳥」2（西宮市段上町6の11の15・笹部方）河内降雨「ツイー・ウェイズ」。なぜか自殺した男だけが集まるある場所では、同じく自死した管理人が死者の生前の事情を聞き、次に進むべき2つの道を教える。死者は自己の人生を納得のいくまで反芻し癒やされ、やがて、進むべき道を選ぶ。仮想の世界を描きながら現代社会の病巣を抉る。集まってくるのが男だけというのは何かの隠喩か、それとも皮肉か。

一見、何げないツールペイント教室の風景だが、才能の可能性をシクラメンの蕾に仮託し、才能の有無の残酷さに迫る秀作だ。同誌の美馬翔「キャベツ畑のサーガ」。劇団旗揚げに関わる人々が、悲哀に満ちたサーガ（物語）をそれぞれの視点から綴る。

（野元 正・作家）

2019.6.29 朝刊

文学作品は人生の岐路に立つたとき生まれることが多い。

「VIRGING」820(和歌山県伊都郡高野町高野山757・田寺方)宇江敏勝「猪」。和歌山中を移動しながら炭焼きをする源弥とヨシ夫婦の間に生まれた作家の「私」。その熱烈な読者で作家志望の亮子に頼まれ、彼女の知り合いの岩見夫婦の窯出しを、八十半ばの母ヨシを連れ、見に行く。

ヨシたちは馬目樫などの原木を求めて移動した。今、原木はトラックで運ばれてくるため、定住で行えるが、窯や炭焼きの方法は変わらない。岩見夫婦の息の合った窯出しの描写に、「私」が幼い頃の両親の炭焼きの苦勞話や若い亮子の視点が重層的に織り込まれ、読み応えのある民俗風物語になっている。

窯出しの最中、猟師に追われ窯に逃げ込んだイノシシの丸焼きを食べたという、奇跡のようなヨシの語りが、とりわけ印象に残る。

同誌の舟生芳美「居酒屋くら

同人誌

人生の岐路の物語

し「バンちゃんの恋」。JRがまだ国鉄だった昭和の大阪が舞台。高架下の手打ち蕎麦処「水車庵」の雇われ店長とその経営者夫妻の珍妙な会話や、ゲイと思われる従業員バンちゃんの恋物語が、大阪の温かさを感じさせ、味のある好編だ。

「革」30(神戸市西区押部谷町西盛584の1・善野方)月島楡「誰もいない朝」。出版社に勤務する「私」はレスビアンだが、周囲には明かしていない。時々、同様の女性たちが集うバーに出入りする。付き合って1年3カ月になる愛子とは何回目かの別れ話。バーの経営者レナは「けんかするのは相性のいい証拠」という。

やがて「私」は愛子がアルコール依存症で自傷癖があり、自分以外に金銭目的のセックスフレンドがいることを知る。彼女は別れたがらないが、紆余曲折あつて独りバーを出て行く愛子の後ろ姿を見送る。「私」は、たぶん彼女を愛していないと気付くのだが、へできるならなに

かを大切にしてみたかった。人を愛してみたかった。性的少数者に対する「非生産的」発言など、いまだ理解が進まない現代社会で、ほのかな希望を感じさせる佳編だ。

「浮橋」3(芦屋市松浜町5の15の712・小坂方)三浦暁子「神戸の坂道が私に教えてくれたもの」。神戸・岡本に35年住む作者は最近、JR摂津本山駅から阪急岡本駅まで歩いたら息が切れ、初めてこの道が坂だと知ったという。坂の苦手な作者が三者面談で息子の高校へどう行くか思案の末、校門まで歩く経緯がおもしろい。

やがて息子は志望通り東京で哲学を学び、大学院に進み、今はようやく哲学の教師になった。坂の多い神戸の町が子育てに必要なすべてを私に教えてくれた」という。子育てに特殊な才能は要らない。少しずつ坂を登ることを気長に待つことだというメッセージに好感が持てる。(野元 正・作家)

2019.5.30

小説の虚構はかえって真実を照らし出すのかもしれない。

「たまゆら」114（滋賀県東近江市五個荘築瀬町字角田413・佐々木方）。「平成」から「令和」へ改元の今、創刊から今号まで28年あまり主宰してきた佐々木国広氏が勇退。彼は2007年「第1回神戸エルマール文学賞」受賞者で、神戸とのゆかりも深い。

佐々木国広「みみずく屋」。比呂は京都の私大を出て出版社に就職したが、対人関係でつまずき退職。アルバイトをしている時、新聞の「本好きによる、本好きのための小さな書店」という記事が目にとまり古本屋の開店を決意する。

一つ年上の元本屋店員利乃と結婚し京都・西陣の路地奥に町家を改造した隠れ家的な店を開く。利乃の発案で、店の奥座敷で出版記念会や読書会を開いたり、ギャラリーやサロンのように使ったり、今風のハイブリッドな経営をめざすが、うまくいかない。利乃は営業と称し文芸

同人誌

行き違う夫婦の心理

評論家と親密に。派手さを増す妻の不倫を疑い悩む比呂の唯一の気晴らしは、休日、バイクで近在の名所を訪れ撮影すること。やがて利乃は古書店を見限り墓石や墓地を廃し、お骨から人工ダイヤを作って故人の思い出にするという、新しい商売を始めるが、比呂は古書店をやめないと言言。

かたくなな生き方を変えられない夫と柔軟に生きる妻の対比。行き違う夫婦の微妙な思いを古書店事情や葬送思想の変化など、現代社会の諸問題と絡めて巧みに描いた好短編だ。

「法螺」78（大阪府交野市神宮寺1の26の6・西向方）西向聡「海峡」。この作品は登場人物、施設名、地名などは仮名だが、塀のない刑務所を脱走し、大捜査網をかくぐって瀬戸内の海峡を尾道まで泳いで渡った脱走事件を見事に小説化した。入念な調査や新聞、テレビ報道などを基に想像を加え、まるで作者が脱走犯であるかのように、逃亡中の行動を巧みな心理

描写を駆使して構築している。

特に冒頭の海峡を泳いで渡る場面や、民家の屋根裏部屋に潜む場面は、迫力とリアリティーがあり、いつの間にか逃走犯に感情移入してしまう佳編だ。

「稲間竹葺」3（大阪府中央区粉川町2の7の711・猿川方）。「法華経」出典の変わった誌名の同人誌。古代をテーマにした小説、エッセーなどの発表の場となっている。芦原瑞祥「有間皇子さま聖地巡礼」。有間皇子といえば、「有馬の湯」を愛し何回も行幸した孝徳天皇の皇子だ。

この作品は作者が、里中満智子の漫画「天上の虹」の登場人物有間皇子の高潔な人柄に惚れ込み創作。中大兄皇子の良にかけかり謀反人として処刑された故地、和歌山・藤白坂や藤白神社などを訪ねる紀行文だが、陰謀に泣く、神戸ゆかりの皇子の足跡の描写が印象に残った。

（野元 正・作家）

文化

小説は常に心豊かな人生とは何かを探求し続けている。

「あへの文学」28（神戸市須磨区友が丘8の201の18・森口方）隠岐都万「ハリケーン」。この作品はバツイチの独身男「私」がコーヒー取引の海外駐在員としてアメリカに赴任中、巨大ハリケーンを体験する物語だ。

「私」はハリケーンの進路がそれると樂觀視して、マイアミに20年以上住む大学時代の同級生で貿易商の尾川と再会、ゴルフを楽しむ。そのさなか、避難命令が出された。だが避難所は満杯で尾川の別邸へ向かう。移動途中の人々の混乱や、別

同人誌 自然の猛威を克明に

邸が廃虚と化すほどのハリケーンの猛威が克明に描写され圧巻だ。ラスト、尾川別邸に偶然避難してきた「私」の元カノ、摩耶とのやり取りに絶妙な余韻を感じた。

昨今、日本に襲来する台風は各地に多大な被害をもたらし、年ごとに巨大化している。これは人類の飽くなき自然破壊に対する辛辣なしつべ返しではないか。ハリケーン来襲前夜の静けさとその後の猛威の対比が巧みな佳編といえる。

また、同誌の桑山靖子「森の思想」は、梅原猛が「森の思想」で提唱した、森は「神の領域」であり、「輝かしい命の泉」という考えが底流する夫婦が主人公。自然と共存する農村生活に回帰する姿に惹かれた。

「てくる」25（大津市竜が丘30の15の713・平野方）平野千景「湖からの風」にびいるの日々。琵琶湖畔を思わせる町に住んでいる真弓は、夫を早くに亡くし独り住まい。娘の瑞希夫婦の家までは電車と徒歩で一時間半ほどかかる。古希に近いわりに足腰が丈夫な真弓に娘は、「寂しいなら遊びに来てば」と口では言うものの、電話をかけても孫の佑太ほど相手をしてくれない。

真弓は図書館で知り合った男、安堂に誘われ、JRの駅近くの寂れた商店街で毎土曜の開かれる落語会に行く。落研の大学生が演ずるのは、明るい落語「へっつい幽霊」。そのあと、湖北の里の一軒家で、地元の人が語る奇妙な体験談を聞く。う

とうとしていると、夢に、幼いときに神隠しにあった銀ちゃんや幼なじみのたかちゃんが現れる。孤独と寂しさに耐えながらも前向きで自由な老後の、ゆったりとした時間の流れが感じられる秀作だ。

「日曜作家」25（大阪府茨木市上野町21の9・大原方）秋葉清昭「幻の青淵塾―渋沢栄一翁の生地―」。秋葉の急逝した友人、宇野正昭の遺稿「幻の青淵塾」を原文のまま紹介。当然、作者らは知らなかったはずだが、4月、財務省は紙幣の図柄刷新を発表、1万円札には渋沢栄一と決定した。時宜を得た作品だ。日本資本主義の父、栄一を現代日本語教育の観点から描いた評伝といえよう。

（野元 正・作家）

人生は奇跡の連続ではないか。

「港の灯」11(神戸市北区緑町5の5の19・神盛方)加崎希和「要(かなめ)」。小唄の松涛派の鏡江は64歳。家元を継いだ妹華子のマネジャーのような仕事をしてきた。

そんな鏡江にもかつて高弟、長居との秘めた情事があった。そのうわさは、鏡江の家庭が遊び人の夫のせいで危機に瀕していたにせよ、松涛派にとっては手痛い醜聞。華子は鏡江に稽古場への出入りを差し止めた。何年かたつて突然、松涛派の公演で受付をしてほしいと華子から電話があった。渋々引き受けた鏡江は、あの長居が、武士の蘭蝶が遊女と浮名を流し情死に

人生は奇跡の連続

同人誌

至る「蘭蝶」を唄い、家元・華子の横であいさつするのを目撃。家元の地位などすべてを華子に譲ったにもかかわらず、長居まで奪われたという怨念が突然滾る。鏡江は舞台上駆け上がり、華子ならぬ長居めがけて小扇子の要をかざして突きかかる。

小唄の家元継承を巡る心の葛藤と姉妹の愛憎を描いた秀作だ。同誌の神盛敬一「ここにいる」や黒見恵美子「雪夜」なども印象に残った。

「繫」14(大阪府吹田市佐竹台4の1の10の1111・佐久間方)楡(か)か隣人」。私立大学を定年前に辞めた晴美は、レジスタンス研究のためイタリヤのローニヤに到着したが、な

ぜか、既視感を覚える。下宿先の隣人ロベルトと知り合い、かつてパルチザンのアジトだったという店に案内される。そこで紹介されたベツピは、晴美の祖母・浪江、母・雪子を知っているらしい。

ベツピは、パルチザンだった父が遺した浪江の写真と日記と手紙を返し、「浪江は僕の家族をファシストからひそかに助けた命の恩人だ」と打ち明ける。そして晴美の母・雪子は、ベツピの父の親友ミケールと浪江の子で、晴美にとってミケールは祖父だと言うのだ。そのベツピも今や80歳、知っていることはすべて話そうと言う。

科学では説明のつかない何か、それは血だという奇跡を巧みに描いた作品だ。同誌の佐久間慶子「満州偽満州 松花江の岸辺を歩く」は、行ったことのない満州を周到な調査で記した光る作品だ。

「烽火」104(姫路市香寺町香呂371の1・大塚方)木下健一「色は匂へど」40年近く勤めた百貨店を定年前に転職、苦渋に満ちた人生を送る良介。唯一の安息の場は、小さな居酒屋「いろは」だった。女将真知子は良介を励まし慰めてくれる存在。実は彼女も、エリート社員の令嬢だったが、結婚に失敗、辛苦をなめた経験を持つ。真知子が父から受け継いだ肉筆の春画浮世絵にまつわる秘密が物語の横系となり、興味深かつた。(野元 正・作家)

科学では説明のつかない何か、それは血だという奇

人生をどう生きるか。小説の重要な命題の一つだ。

「せる」109（大阪府柏原市片山町9の15・益池方）。奥野忠昭「世に背く―西行出家遁世秘録」。12世紀の平安時代、西行（佐藤義清）が俗世の汚濁を逃れて出家するまでの経緯や動機を探る。

ムカデ退治で有名な藤原秀郷を祖と仰ぐ佐藤家当主の義清は、徳大寺実能の従者と、紀伊那賀郡にある田仲荘預所（現地荘園の長）を務めていた。

その頃の京は天変地異が続き、飢饉による飢餓や、夜盗、放火、僧侶の墮落などがはびこる末世。義清は西方浄土や東方浄瑠璃浄土を信じ、和歌の世界に憧れる。田仲荘の境界紛争でも鳥羽院庁の裁定に不服ながら武辺のいさかいを好まない。実弟仲清の方が荘園経営に向いている、と思う現実とはさまに悩む。あの平清盛とともに務めた上皇警護や京警備など北面の武士の職務にも懷疑を抱く。警護の途中で垣間見た待賢門院璋子との思わぬ逢瀬と失恋などを

小説の重要な命題

同人誌

経て、23歳の義清は妻子を捨て出家遁世の決心をする。

義清の心に潜み肥大化する白い塊は俗世への悲哀と諦めの表徴か。諸説を踏まえ、緻密に構築された300枚超の大作だ。

「イングルヌック」4（大阪市中心区粉川町2の7の711・猿川方）。猿川西瓜「五百万円」。俺は郊外の賃貸マンションで、無味無臭の球体のような黒いかたまりと、もう3年暮らしている。こいつは俺としゃべると、黒いタールのよう液体をまき散らし辺りを汚す。俺の日課はこの汚れを掃除することだ。作業が済む度にこいつの上にとビニール袋を置くと、体内に取り込まれ、体外に出てくると紙幣が入っている。

こいつは女性らしく、自堕落をしていたら黒いかたまりとなり、両親から軟禁されたという。親の金庫から有り金を奪い、俺の所に来たのは、こいつの高校時代に俺がいじめから助けたからだそう。こいつに依存した生活で良いのかと自戒する

が、いつもやむやみになる。やがてかたまりは俺の失敗などを豪快に笑い、液体をまき散らし笑うたびに急速に小さくなる。

黒いかたまりが何を表徴するメタファーなのか。多様な解釈ができて興味深い作品だった。

「うぐいす」2018発行版（神戸市西区伊川谷有瀬518、神戸学院大学内・小説創作研究会うぐいす）。森野真宵「ティアラとドレス」。ネットで知り合った17歳女子高校生2人のティアラとドレスは、実は2人ともオッサンのなりすまし。共に妄想を抱いて会うが、なぜか居酒屋に飲みに行つて意気投合。結局、2人とも誰か話し相手が見つかったがオチだった。一見ありきたりだが、現代社会の恐怖を象徴する作品だ。

同誌の明神輝将「僕の行方」は、盆に墓で花火を上げて先祖を供養する習慣が妙に印象に残った。

（野元 正・作家）

人の心は複雑。それを書ききろうと試みるのが同人誌小説だ。

「あめんすい」31(神戸市東灘区同洋町5-5-32の2・西川方の橋尾亨子「色の目」。名門大学卒業後の半年間で3度も失職した敦。高い気位のままならぬ現実のギャップに悩む美家に帰るが、父母に失業を打ち明けられない。幼稚園で働く高校の同級生、早苗と、幼なじみの幸子が話を聞いて心を癒してくれる。

早苗にピアスを聞かせてもらおうと幼稚園で2人きりになったところに園長である早苗の父と母が帰ってくる。敦の失業話を聞いたのが、人間のくずとのしられる。このときコンニニでアルバイトをしていたが、すぐ返すつもりでシジから1万円を拝借したことでやめさせられる。やがて教授あつせん製の紙工場に勤めるが、ろくに仕事をしなかったため解雇。パチンコ屋に顔が利く女に詐欺まがいの目にあつた後、パチンコ屋の清掃員として日々働く。

現実を直視しない、おめでたい男に世間が甘くないことを徹底的に知らしめる好纏だ。

同誌の植田多江子「町の気配 秋から春へ」は、いくつかの短編からなる珍しい形式の作品。特に「穴を掘っていた」で始まる掌編が印象に残る。

「別冊關學文藝」57(大阪市中央区西平野町2-3-11の202・澤藤内)。浅田厚美「霧立ちのぼる」。百人一首がテ-

神戸新聞 2019.1.26 朝刊
複雑な人の心書ききみる試み

同人誌

アの短編連作で55号から始まり、今号の3回目で完結。一つの場面を違う角度から描く。

主人公は、この町に住まなかつたら、カルタを一生やらなかつたと思う私。知り合った上垣内さんから年一回ある区のカルタ大会に出る町内チームのメンバーにならないかと誘われるのは同じだ。今号は父、夫、特に美貌の母や私の心奥なども入念に書き込まれており、秀逸だ。

「babe1(バベル)」2(大阪府八尾市木の本2の23・森中万)の真銅孝「アジアの歌姫」。一行の政行もなく、正直読みにくい。タテとされる書き方だが、読み進むうちに何かしら快感に似た感情が湧いてくる。文字が音を奏でている感じで、いわばページに詩が詰まっているようだ。

舞台は、ミュージックが終わり、マジシャンが舞台のそでに隠れた華麗な空間。音楽が流れ、歌が世界を一つにする。「アジアの歌姫」みつちゃんの澄み切った歌声。ミラーボールが光をふりまき、虚実皮膜のショーをたたえている。今日のすべてがミラーボールの光のように瞬間で終わる。

「うきまじかめ」「青い眼の今形」「海」の歌詞が巧みに織り込まれ、海や青い炎など彩り豊かなイメージがあふれる。現実とも心象風景とも分からない不思議な世界。詩的文脈がひしめく極めて興味深い実験作品といえる。

(野元 正・作家)